國學院大學学術情報リポジトリ

Masaru Oda, a reference grammar of classical Japanese

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Koyanagi, Tomokazu
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000159

〔紹介〕

小田勝著『実例詳解古典文法総覧』

小柳智一

小田勝氏の前著『古典文法詳説』は研究史上まちがいなく最重要の古典文法書だったが、あいにくなことに刊行して間もなく品切、入手困難な本となっていた。それが五年の後、大幅な改訂増補を施され新たに出版された。本書である。まずはこのことを心から喜びたい。私はかつて『古典文法詳説』を紹介する機会に恵まれたが（本誌第112巻第3号）、今回再びその栄に浴することとなった僥倖を嬉しく思う。

最初に、本書の基本方針と章立てを紹介しよう。基本方針は『古典文法詳説』を踏襲している。すなわち、近年の研究成果を多く取り入れ、現代日本語文法書や英文法書の枠組みを採用することで、現代語研究で話題となる現象が古典語でどうなっているかに容易にアクセスできるようにする、また、珍しい句型や従来触れられていない様々な表現形式を積極的に取り上げることで、古典解釈のための辞典という側面を持たせる、というものである。『古典文法詳説』と異なるのは、資料に関する点である。「はしがき」に挙げられている七項目の特色のうち二番目の項目に次のようにある。

2．従来あまり用いられて来なかった、私家集、歌合、定数歌などの古典和歌から積極的に挙例したこと

たしかにこれまでの研究では、これらの資料を取り上げるこ

とは少なかった。古典語・日本語史研究の主たる関心が当時の口語的表現であったせいか、同時代に散文資料があればそれを使用し、文芸の色が強く時に擬古的な和歌は使用しない傾向があった。なかでも私家集の類は本文や成立の問題があって、むしろ忌避されてきたように思う。しかし、本書のおかげで、見過ごされてきた面白い事実に触れられる。一例を挙げれば、他撰の歌集の詞書には「花咲きはじめたりけるを見てよめる」〈古今和歌集・四九番〉のようにあるが、自撰の歌集には「嵯峨野の花をかしかりしを見る」（赤染右衛門集・一番）のようにある（154頁）。「けり」と「き」の違いの一端を表していて興味深い指摘である。私家集類を資料に加えたために、用例の出典数は『古典文法詳説』を大きく超えて三三二作品に上り、まさに空前（おそらく絶後——小田氏がさらなる増訂版をものさない限り——）の文法書となっている。

章立ても『古典文法詳説』を継承している。次に各章のタイトル一覧を掲げる。

第1章　序論　　第2章　動詞
第3章　述語の構造　　第4章　ヴォイス
第5章　時間表現　　第6章　肯定・否定
第7章　推定・推量　　第8章　当為・意志・勧誘・命令
第9章　疑問表現　　第10章　形容詞と連用修飾
第11章　名詞句　　第12章　格
第13章　とりたて　　第14章　複文
第15章　複合辞　　第16章　引用・挿入
第17章　係り受け　　第18章　敬語
第19章　談話　　第20章　物語の文章
第21章　和歌の表現技法

はじめに、第1章で古典文法の基礎知識を解説する。第2～9章は主として述語に関わる内容、第10～13章は修飾や名詞句など、第14・16章は複文的な表現、第17章と第19～21章は構文・文章・和歌技巧などに関わる内容である。第18章は古典語の複雑な敬語を相当に詳しく記述する。以上の章は『古典文法詳説』にもあったが、本書では新たに第15章が加えられた。複合辞とは「複数の語がまとまって固有の辞的意味を担う形式」（518頁）で、その一まとまりが全体で格助詞や接続助詞に相当するものである。複合辞は現代語研究で近年盛んに論じられており、古典語の複合辞にどのようなものがあるかは、古典語研究者だけでなく、現代語研究者も知りたいだろう。しかし、それを教えてくれるものはなかなかなかった。このような研究状況にあって（これも複合辞）、本章では古典語の複合辞が辞書

風に多数挙げられている。例えば「～といはば」「～につけつつ」「～よりはじめて」「～をおきて」などなど。今後の研究にとって有用な資料になると思う。

ところで、著者の小田氏には非常に強い一つの思いがある。それは本書2頁に太字で次のように吐露されている。

解釈は、つねに文法に抵触しない範囲内で行わなければならない。

そして、(1)の古今和歌集の歌の傍線部を「来る」と解したり、(2)の枕草子の傍線部をいくつかの注釈書のように推量と解してはならないと、具体例を挙げて指摘する。

(1)夕月夜をぐらの山に鳴く鹿の声のうちにや秋はくるらむ
〈古今和歌集・三一二番〉

(2)さることも聞こえざりつるものを。昨夜のことにめでて行きたりけるなり。
〈枕草子・第五段〉

まことにもっともである。古典文学作品はまず第一に言語である。言語であるなら、その言語のルールに沿って読解しなければならない。もし私意（恣意？）の入る隙があれば、その先の話である。だから、その作品を成り立たせている言語に忠実であること、一語一句一文を丁寧に解釈する訓練が大切なのである。古典文学作品の読解に当たって、小田氏の右の言葉は重く受け止められるべきであり、そう考えて読解をする際に絶大な効力を発揮するのが本書なのである。

語の意味がわかりさえすれば、文が読めるというものではない。文の構造が正しく掴めなければ、正確な読解には届かない。試みに源氏物語の次の文章を読んでみよう。薫が阿闍梨に浮舟の供養について指図する場面である。

(3)①阿闍梨、今は律師なりけり。召して、この法事のこと掟てさせたまふ。念仏僧の数添へなどせさせたまふ。②罪いと深かなるわざと思せば、③軽むべき事をぞすべき、七日七日に経、仏供養ずべきよしなど、こまかにのたまひて、
〈源氏物語・蜻蛉／句読点は新編全集6・237頁に従う〉

この文章全体は一貫して薫を主語とするが、傍線部①の文は阿闍梨が主語で、唐突の感がある。直後に「召して」とあるから薫が阿闍梨を召すということはわかるが、それにしてもいきなりで何か変である。「今は律師なりけり」がなければ、「（薫ガ）阿闍梨、召して」と続いてわかりやすいのだが。こういう時は本書の第16章を見るとよい。挿入句が「前の語句や文脈に対する補足説明を表している」場合として、次例が挙げられている（538頁）。

(4)気高くして端正美麗なる童、鬘を結ひて束帯の姿なり、来

たりて、　〈今昔物語集・巻第十三・第十〉

この例の傍線部は「気高くして端正美麗なる童」を説明する挿入句で、文の主旨は「気高くして端正美麗なる童、来たりて」である。これを見ると、傍線部①の「今は律師なりけり」も「阿闍梨」を説明する挿入句であるとわかり、したがって、直後の句点は読点に改めるのが適当である。

次に、傍線部②は「と思せば」に続くので心内文、傍線部③は次行に「のたまひて」とあるので会話文である。それはよいとして、傍線部③から始まる会話文はどこで終わるのだろうか。ここは薫が阿闍梨に指示する内容だから「七日七日に経、仏供養ずべき」ことも会話文に入ると考えられるが、「……よし」まで発話したというのは不自然である。ここで本書第20章を読むと、「会話文の末尾が地の文に推移する例」（646頁）として、次例が参考に供されている。

(5)「さらば、この（＝大宮ノ）御悩みもよろしう見え給ふを、かならず聞こえし日違へさせ給はず渡り給ふべきよし、聞こえ契り給ふ。　〈源氏物語・行幸〉

この例では「さらば」で始まる会話文がいつの間にか地の文に移っている。もし最後まで会話文であったら「『さらば、……渡り給ふべし』と、聞こえ契り給ふ」とあるところだろう。この例から、会話文が「……よし」の形で地の文に移る文章のスタイルがあったことが知られ、(3)も同じタイプだと判断される。「『軽むべき事をぞすべき。七日七日に経、仏供養すべし』など、こまかにのたまひて」とあれば、現代の我々にもスムーズに読めただろう。このように読解する上で構文関係の正確な把握は重要だが、それを詳しく説く文法書はほとんどなかった。本書が特別な文法書であることが実感されると思う。

さて、本書はある語がどのように使われているかを詳細に観察する記述文法の本である。だから、なぜそのように使われるかは述べない。本書に「なぜ」はないが、しかし「なぜ」に出遭う場所はあちこちにある。例えば、第5章のアスペクト（「語られる事態が、動き全体の中でどの段階（局面）にあるかを表す用言の形態」122頁）に関する記述を読むと、「咲けり」などのリ形は「saki+ari > sakeri」とでき、「得たり」などのタリ形の「－たり」は「－てあり」からできたことを解説し（135－136頁）、また、上代には「あり通ふ」のような「あり－」という継続の表現があったことを紹介している（141頁）。この三つの形にはすべて「あり」が関わっているが、なぜ「あり」はアスペクトの形成にこれほど深く関わるのだろうか。また、「あり」は動詞の後に来たり前に来たりするが、これはどうい

うことだろうか。もしこういう「なぜ」に直面したら、読者は古典語の世界へさらに分け入る扉の前に立っているのである。それはまた本書をより深く楽しんでいることでもある。

本書は他にも密かな楽しみを与えてくれる。前著『古典文法詳説』と本書でどこがどう変わったのか、それを見つけるのは小田氏のファンにとって愉楽の遊戯である。前著では「検査を受けた吉田氏は、ほがらかな顔で出てきた。」（266頁）とあった例文が、本書では「検査を受けた小柳氏は、ほがらかな顔で出てきた。」（325頁）と変わっていた。吉田氏に続き私も悪い病気ではなかったようで安心した。

その吉田永弘氏が本書を「古典に関心のある人にとって必携の書」（『國學院大學学報』第638号、平成二七年九月）と評している。その通り、古典に少しでも関心のある人は、本書を持っていないと必ず後悔する時が来るだろう。本書はそれほど重要で有用な本である。最後に、かくも大部で内容豊かな本を、学術書としては破格の定価で世に行き渡らせようとされた篤実の出版社に深く敬意を表したい。

（A5判、七五二頁、和泉書院、二〇一五年四月発行、定価八〇〇〇円＋税）